エッセイ特集２　ヴィクトリア朝研究の現在

ラフカディオ・ハーンとワッツ＝ダントンとの接点をめぐって

河村　民部

これはラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn＝小泉八雲）とセオドア・ワッツ＝ダントン（Theodore Watts-Dunton）との間の接点をめぐっての幾つかの覚書である。ハーンとワッツ＝ダントンに直接の面識があったと言うのではない。だが、ハーンが自分の日本の最初の印象記『日本瞥見記』（*Glimpses of Unfamiliar Japan*, 1894）を出版した時に、これを書評に取り上げて称讃したのは、19世紀イギリス批評界の第一級の文芸誌『アシニーアム』（*Athenaeum*）であり、それに自分の作品が書評され、讃辞を受けていることを知ったハーンは、そのことをイギリス人の友人チェンバレンへの手紙に認（したた）めた。『アシニーアム』と言えば、その当時、その雑誌の書評を我が物として、健筆を振るっていたのは、誰あらん、セオドア・ワッツ＝ダントンであった。ハーンもこの事実を知悉していたであろうと思われる。

以下の幾つかの覚書は、直接の面識のない二人の間に通い合う文学者としてのテレパシーのようなものの表れを筆者が捕捉したものである。二人の間に通い合う不思議なものの捕捉は、筆者の単なる妄想の網のなせる業にすぎないのであろうか。

（1）「黄玉（トパーズ）色の夕日」――Lafcadio Hearn, *Glimpses of Unfamiliar Japan*（Houghton, Mifflin and Co., 1894）における日本の春の夕日の「黄玉（トパーズ）色」とTheodore Watts-Dunton, *Vesprie Towers: A Novel*（London: Smith, Elder & Co., 1916）における家宝の宝石「黄玉（トパーズ）」を巡って

ハーンは1890年4月横浜に着いた。その時の印象記、彼の日本での出版第一冊目が、上記の『日本瞥見記』である。この印象記の第一章「東洋

の土を踏んだ日」(“My First Day in the Orient”) 第10節を読むと、ハーンの生まれ持った繊細さがそこに封じ込められていて、彼の感性の特質がすべて表明されているという印象を強く受ける。この章を細かく分析することは、ハーンの心を知ることになる。そのキーワードは、「幻」(“ghostly,” “delusion,” “phantom,” “illusion”)、「夢」(“dream,” “magical,” “witchery”)、「夕日」(“the sun sinking”)、「黄玉色の光」(“topazine light”) である。

とりわけ筆者が注目しているのは、沈みゆく春の夕日が「黄玉色」に輝いているという描写である。横浜に着いて、はじめて町を「チャ」の曳く人力車に乗って走り回り、特に注目を惹いた神社と寺を廻って、その幻のような非現実の世界にどっぷりと浸かったハーンが、春の夕暮の中を人力車に揺られながら宿に戻ろうとしている。その時彼が眼にするのが、沈みゆく太陽である。それは「黄玉色の得も言えぬ柔らかな光の中に、今にも沈もうとしている」(“sinking in the softest imaginable glow of topazine light.”)。そして「日は沈み、黄玉色の光も消えた」(“The sun is gone; the topaz-light is gone…” (26)。そしてハーンはまだ待望の釈迦の姿にはお目にかかっていない。

この場面の沈みゆく太陽の「黄玉色」という表現が印象深い。これは直ちに筆者には、セオドア・ワッツ＝ダントンの小説『ヴェスプリー・タワーズ』における家宝の宝石「ヴェスプリーの幸運」と呼ばれる「黄玉」を思い起こさせるからである。零落(おちぶ)れた名門ヴェスプリー家の女主人公ヴァイオレット・ヴェスプリー (Violet Vesprie) がロンドンの貧困の極みの中で、夕日に照らしてみる最後の望みが、彼女の持つ「黄玉」の宝石なのである。

ヴェスプリーの屋敷が何度抵当を払えないで売りに出されようとも、決して他人の手に渡らないのは、家宝の「黄玉」があるからだという言い伝えがあり、そのことを証明するかのように、その宝玉が代々の家督を継ぐ者の手に継承されてきた。だが物語の中では、その継承者がただひとり生き残った少女となり、彼女がひとりで債権者の好意から館に住まわせてもらっていたが、その心優しい債権者が亡くなってからは、財産管理を任された法律事務所が少女ヴァイオレットに館を立ち退くよう言い渡す。已む無くロンドンに出たヴァイオレットは、一文なしになり、肉体労働に身を

落してのその日暮らしを屋根裏部屋に凌いで4年経つが、ヴェスプリーの館への帰還の夢は已み難く、遂に財産管理をしているロンドンの法律事務所に出かけて、館までの往復切符が買えるだけの旅費を借り受けようと決心する。その前日の夕方、ヴァイオレットが袋から取り出して、沈みゆく夕日に翳してみるのが、この「黄玉」である。そこにはヴァイオレットを窮地から救出する或る魔力が働いていたのである。翌日ヴァイオレットが法律事務所に旅費を借りに出かけると、彼女を待っていたのは、これから明らかとなる幸運であった。やがて館に戻った彼女を待っていたのは、いったんは売却された館の所有者となった或る夫人が、彼女の娘がロンドンでヴァイオレットに救出されたことの返礼として、遺言に夫人の得た財産のすべてと館を元の持ち主に譲るという幸運であった。

こうして、言い伝え通り、「幸運の黄玉」の神秘的な働きのせいで、館は元の彼女の所有に帰し、のみならず、莫大な遺産までも譲り渡されて、愛する若者（その夫人の息子）と結ばれることになるのである。

筆者がここで言いたいのは、ワッツ＝ダントンの小説『ヴェスプリー・タワーズ』の家宝である「黄玉」が、ラフカディオ・ハーンの『日本瞥見記』における彼の日本の第一印象を飾る第一章の春の夕暮の光の色と結びついていることの不思議さである。異国に降り立った時のハーンの第一歩の印象を彼の繊細な心に刻んだのが、この日本の春の夕暮の日の光の色、つまり「黄玉色」であったということだ。これはワッツ＝ダントンの小説の「黄玉」が神秘的な力を有する宝玉であるように、その色はハーンにとっては、「妖精の国」と思えた日本の不思議な力を象徴する色彩であったからだ。この横浜での第一日の締めくくりをする「黄玉色」の夕日から、ハーンの日本における十数年に及ぶ滞在が始まり、終焉を迎えることになるのであるから、この第一日目の日没の光景は、ハーンの来たるべき人生のまさに「幸運」を予兆するものであったということができるのである。

あるいは話を逆にして、1894年に出版されたハーンのこの日本印象記を読んで、ワッツ＝ダントンが『ヴェスプリー・タワーズ』の家宝の宝玉を「黄玉」に定めたのかもしれない。というのは、ハーンのこの印象記が出版された年の11月の『アシニーアム』誌の書評に、この本が取り上げられて、絶賛されているからである。いろいろ調べてみたが、この書評をしたのが

当時編集主幹であったワッツ＝ダントンであるとは、確定できなかった。だが、その書評をよく読んでみると、日本の封建社会から明治維新への移行のプロセスや、神道復古と仏教への寛容さの回復などへの言及、および日本を外から見るのではなくて、内なる眼で眺めて、日本が古くから維持してきた美しい風習・文化の意義の発掘を、産業革命による科学主義文明との対比で論じているのは、東西の文明・文化を広い知見から眺めやることのできた文人の筆になったものに違いないのである。そこに、眼に見えない神秘的な働きをする者の存在を浮かび上がらせる精神の共鳴が、ワッツ＝ダントンとハーンの間にあったのではないかと、思うのである。

筆者には「黄玉」という一語が、摩訶不思議な網を投げかけて、実際には出逢うことのない運命にあった二人を結びつけたように思われるのである。

(2) Lafcadio Hearn, *Glimpses of the Unfamiliar Japan*, 2 vols.（Osgood, McIlvaine, Co. 1894）の *The Athenaeum* 誌書評について

何故筆者がハーンの『日本瞥見記』及びその書評に注目したかというと、それは工藤美代子の『ラフカディオ・ハーン ――漂泊の魂』（NHK ライブラリー、1995）を読んでいて、『日本瞥見記』の評判について、ハーンが「誇らしげにチェンバレンに報告しています」（156）として、その手紙（1895年1月）の一部を日本語訳（斉藤正二・藤本周一・山下宏一共訳「書簡 II――ハーン＝チェンバレン往復書簡」『ラフカディオ・ハーン著作集』第十五巻、231ページ）で引用しているが、その中に「アメリカでの熱狂的な評判」の他に、「『アセニーアム』誌は熱烈に称賛しました」（157）とあるので、『アシニーアム』（筆者はこの雑誌を従来このように言い習わしているので、その表記を踏襲する）といえば、編集主幹のセオドア・ワッツ＝ダントンを措いて他にはないと思い、早速その書評を近大の中央図書館から取り寄せてもらい、読んだ。

ハーンの『日本瞥見記』の書評（Nov. 10, 1894）がセオドア・ワッツ＝ダントンの筆になるものか否かは不明だが、日本が1870年代には、1860年代に行われていた廃仏毀釈を廃止して、仏教文化を許容するようになったという歴史的認識など、正確に書いてあるし、学校教育では、男児のみな

らず、女児にも文字を教えている点に注目し、イギリスやドイツも見習う必要があると言うが、他方明治の日清戦争（1894）における日本の中国及び朝鮮半島進出を批判して、日本がその文化を吸収し、国を樹立してきたのは中国や朝鮮半島からではないかと、言語・文字の基礎を与えた国を侵略することの不当さを述べており、1890年代の日本は西欧流の物差しを輸入して、それで学問を教えていると称しているが、それは本来あった信仰を放棄した、表層的なものでしかないと言い、今の日本の若者には、かつての信仰・信念がないことを嘆いている。

それが今でも残っている所が、ハーンが中学に赴任して教鞭を取った神々の集う町、松江だというのである――その古い風習を外からの眼ではなくて、内側から、地に足をつけて認識しているのがハーンであると高く評価している。恐らくこの書評は評者のイニシャルはないが、洋の東西にあまねく精通したセオドアならではの評だと思われる。

もう少し、この書評がセオドアのものか否かについて、彼が書いた詩論の優れた一篇である “The Renascence of Wonder in English Poetry”（*Chambers's Cyclopaedia of English Literature*, 3rd Vol., 1904）の一節と比較してみよう。上述したように、『アシニーアム』の書評では、明治期の1860年代における廃仏毀釈と神道復活のあとの70年代での仏教容認への緩やかな移行に言及しながらも、江戸時代を文明の停滞した時期ととらえ、それ以前の文明文化の古い層にこそ、日本人の優れた特質を見て取ることができるという点を強調し、それらの残っている典型的な田舎が松江だと言うのである。セオドアの「不思議の復活」論では、文明の進展と停滞は、芸術の場合と同様に、「事物の不思議を感ずる精神」（the impulse to confront wonder）と「事物をありのままに受け取る受容の精神」（the impulse of acceptance）の交互作用によって生じると言う。前者は事物の不思議を感じることによって、人は前進を余儀なくされ、文明が進展するが、その文明が当たり前のものとなって驚きを感じないものとなると、そこに文明の停滞が生じると言う。芸術の場合も同様な「驚き」と「受容」の繰り返しの跡を辿ることができると言うのである。

そして「不思議の復活」論で、セオドアは、日本は何百年もの間「神道」に基づく「驚きの精神」の支配下にあって文明が著しく進展したが、それ

が或る頂点に達すると、しばらくの間は停滞状態となったと言う。この停滞期は仏教の支配下に置かれた時期で、恐らく江戸時代を指していると思われる。その後の明治期への言及は、残念ながら、この「不思議の復活」論の中にはない。その明治期の文明の進展への言及が、ハーンの『日本瞥見記』の書評ではなされており、「不思議の復活」論での日本への言及に続けて「書評」のその部分を読めば、紛れもなく、セオドアが一貫した日本の歴史・文明・文化認識のもとに、この「書評」を書いたと推測することが可能であるように思われる。

このように考えた後に、友人のRichard Kelly氏の大学時代の同僚で、今はアイルランドのコーク大学（UCC）のライブラリアンをしているJohn Fitzgerald氏とも知己になった筆者は、思いついて彼に頼んで、ハーンの『日本瞥見記』の『アシニーアム』における評者が誰であるかを知る手立てがないものかどうかを教えて欲しいと頼んでおいた。すると彼から返事があり、『アシニーアム』の書評とそれらの評者が誰であるかを大掛かりな調査で、できる限り特定したデータ・ベースが、City University, Londonにあることが判明し、そのデータ・ベース作成に関わった者の書いたエッセイ “Indexing *The Athenaeum*: aims and difficulties”（*The Indexer*, Vol. 17, No. 3, April 1991）を送ってもらった。そのエッセイには、書評は匿名のものも多くあるが、評者への支払いのためなどの理由があって、記事の原稿の空白などにその評者のイニシャルあるいは誰と特定できる印が記入されている場合が多々あるので、これを頼りに、データ・ベースを時間をかけて作成したと言うのである。

こんなうれしい報せはない。筆者は喜んで、フィッツジェラルド氏から送られてきたCity University, Londonの図書館宛にメールを書いた。すると、すぐさま丁寧にも返事をくれて、Thorpe Cris氏が、調べてみたが、ハーンのその書評原稿には、確かに何らかのサインがしてあるが、それがTheodore Watts-Dunton乃至はセオドアがよく使う省略形のT-Wとはどうも読めないと言う。そしてクリス氏は、さらにもう少し調べてみると言って、次に送ってくれたのが、その誰かのサイン入りの原稿の写しであった。それを拡大して読んだが、どう見てもTheodore Watts-Duntonではなくて、“Dickins” / “Dickens,” “Aickins” / “Adams”のように読めると言う。

したがって、筆者も、ハーンの『日本瞥見記』の『アシニーアム』誌上の評者はワッツ＝ダントンであるとは断定できない。では、一体誰がハーンの本の書評をしたのかということであるが、可能性としては、『日本瞥見記』の「諸言」(“Publisher’s Forward”) を書いた人かもしれないし、『怪談』(*Kwaidan*, 1904) の「序文」(“Introduction”) を書いた人かもしれないという思いがしている。前者の「諸言」の入っている版を、残念ながら筆者は目下持っていないので何とも言えないが、筆者が最近入手した後者の方の「序文」(Book Depository印刷) ――両者とも匿名であり、筆者の知る限り、これまで両者の日本語訳はされた形跡がない――の内容からすると、『怪談』が出版されたのが、丁度日露戦争の時で、日本が大国ロシアを相手に戦っているが、その事情はともかく、そうした植民地戦争を引き起こしている日本精神とは異なった、別の精神が日本人にはあり、それが具現されているのが『怪談』という物語群であるから、日本人の本来の姿を見て欲しいという趣旨のことを英語の読者に訴えているのである。

この『怪談』の「序文」を念頭において、『日本瞥見記』についての『アシニーアム』の書評を読むと、この「序文」の作者の口調によく似たものが、そこにも表明されていることに気づくのである。明治の新しい気運のもとに展開されている日本人精神とは異なった内に潜む本来の日本人の精神を内側から活写したのが、本書であると書いてある。このことからすると、あるいは、『アシニーアム』のこの本の評者はこの『怪談』の「序文」の作者ではないかとも思えてくる。『日本瞥見記』の「諸言」の作者も、『怪談』の「序文」の作者も今の所は誰であるかは不明である。ハーンの曾孫の小泉凡氏にお尋ねしたが、凡先生もそれらのものの作者が誰であるかはこれまで、考えたこともなかったと言われ、驚いておられた。

(3) Edward Laroque Tinker, *Lafcadio Hearn’s American Days* (New York: Dodd, Mead and Company, 1924, 1st edition) と Theodore Watts-Dunton, *Vesprie Towers: A Novel* (London: Smith, Elder & Co., 1916) における「混血児」への言及をめぐって

セオドア・ワッツ＝ダントンの死後出版小説『ヴェスプリー・タワーズ』の中に、19世紀のフランス人小説家アレクサンドル・デュマ (Alexandre

Dumas, 1802-70）がアメリカでは大変な人気があったのに、なぜ彼がアメリカの地に足を踏み入れることをしなかったのかということをめぐって、イギリスの女性とアメリカの女性が話を交わす場面がある。

イギリス女性はヴェスプリー・タワーズの継承者ヴァイオレット・ヴェスプリであり、アメリカ女性はヴァイオレットのロンドン滞在中にこの館を一時借り受けているジョセフィーヌ・サールウェル（Josephine Thirlwell）という画家である。ジョセフィーヌ自身は彼女の中には黒人の血が流れていることを直接には認める発言はしないが、ヴァイオレットには友人の特殊な美しさがクレオール特有のものであることが分かる。それは人種に関する話に触れると彼女がとても敏感に反応することから、察知されるのであった。

二人の女性の間で、二人とも大変高く評価している小説家としてアレクサンドル・デュマのことが話題となった時、ジョセフィーヌがエドガー・ポーの「黄金虫」（“The Gold-Bug”）はデュマの『モンテ・クリスト伯』（*Le Comte de Monte-Cristo*）を深く吸収していないと書けなかったであろうと言い、デュマの祖母が完全な黒人であり、デュマ自身は四分の一黒人（quadroon）であることを知っているかと、ヴァイオレットに尋ねる。

ヴァイオレットがそのことをすっかり忘れていたと言うと、ジョセフィーヌは、それはあなたがイギリス人だからであり、アメリカ女性ではないからだと言う。ヴァイオレットがジョセフィーヌの言う意味を測りかねていると、ジョセフィーヌは、デュマがなぜアメリカの地を踏まないかについてこのように語る――「アメリカでは有色人種の容疑は罪の容疑よりもずっと恐ろしいのです。ドル紙幣の力で以てしても、血の中に在る色の容疑は拭い去ることはできません。他のことはすべて寛恕することができます。でもこれは事実です――ええ、そうなのです、恥ずべき事実です、あなた――アレクサンドル・デュマがアメリカの読者の偶像であった頃、彼は侮辱されずには、アメリカの地に姿を見せることは殆どできなかったであろうってことは。ところが、イギリスでは彼にはアフリカ人の血が流れているという事実は、むしろ何よりも関心の的だったのです！」（拙訳『小説ヴェスプリー・タワーズ』、英宝社、259-60）。この点でジョセフィーヌはアメリカ人よりもイギリス人が好きなのだと言うのである。

『小説ヴェスプリー・タワーズ』を翻訳しながら、筆者は、アメリカとイギリスとでは、これほども有色人種に対する反応が違ったのかと不思議に思い、このことが腑に落ちないでいたが、或ることからエドワード・ティンカーの書いた『ラフカディオ・ハーンのアメリカ滞在記』を読むことになり、その中で、アメリカにおけるこの有色人種の問題に改めて直面することになった。その引き金となったのは、工藤美代子の『ラフカディオ・ハーン――漂泊の魂』の中で、工藤がティンカーのこの滞在記でハーンの個人的体験としてこの問題が取り上げられていることを指摘していたからである（57-58）。それで改めて原文に当たってみた。

アメリカに来て間もない頃、ハーンはオハイオ州の町シンシナティーで *Cincinnati Enquirer* 紙のレポーターとして過酷な日々を送り、そのために近視の一眼しか役に立たない彼の視力は悪化し、昼夜別ない仕事のために健康を害して、最悪の状態にあった。それをさらに悪化させるような事態へとのめり込んでいくのが、ハーンの癖であったが、この時はアルシーア・フォリー（Althea Foley）という下宿先の女中――「可愛いくて、がっしりした体格の、黒人の血が八分の一入った混血児」（“a pretty, well-made octoroon girl,” 27）――との関係が発展して、結婚にまで到るという事態であった。アルシーアという名前は、しかし、「健全な、癒し人」というギリシャ語が語源であり、結婚後のことはいざ知らず、その名の通り、泥沼のような窮乏生活の中で蹠（もが）いていたハーンに救世主のような優しさで接したのである。

黒人女性に惹かれた理由として、伝記作者のティンカーは、ボードレールの詩に描かれた黒人女性の魅力とハーン自身の血の中にある隔世遺伝的なムーア人の官能的な血のなせる業ではないかとか、ハーンがイギリス人であったから、仕事仲間のアメリカ人ほどには人種差別意識がなかったのではないかと言う。後者の指摘は、ワッツ＝ダントンの小説の中でのクレオールの血を引くアメリカ女性ジョセフィーヌのヴァイオレットに対する言動をまさしく裏書きするもので、筆者は、これを読んで納得した。

さらに、ハーン自身が、ティンカーの言うように、「異種族混交」（“miscegenation,” 28）の存在であったがゆえに、一時ではあれ、自分を暖かく受け入れてくれる黒人の血を引く癒しの女アルシーアとの結婚を、当

時のオハイオ州の白人と黒人の結婚禁止という法律に逆らってまで、密かに式を挙げたのである。

こうした自伝的事実もさることながら、ハーンの『怪談』中の名作「雪女」で扱われる「異種混交婚」(hetero-species marriage) というテーマの根幹には、ハーンの黒人女性との結婚という事実も少なからず作用しているのではないかと思う。

(4) ハーン及びセオドア・ワッツ＝ダントンにおけるアルフォンス・ドーデとアレクサンドル・デュマの存在意義

上記 (3) に続くテーマであるが、ラフカディオ・ハーンとセオドア・ワッツ＝ダントンとの接点の一つに、アルフォンス・ドーデとアレクサンドル・デュマの存在がある。このことを例証する記事がハーンによって書かれている。その一つが "New Orleans: some little Creole songs" と題する記事で、*Cincinnati Commercial*, February 18, 1878 に載ったものである。そこではハーンはまだ本格的には蒐集されてはいないクレオール人の唄の幾つかを取り上げ、英語訳をも試みているのであるが、彼がクレオールの唄に興味を持った理由の一つが、19 世紀フランスの小説家アルフォンス・ドーデ (Alphonse Daudet, 1840-97) の小説 *Fromont Jeune et Risler Aîné* (*Young Fromont and Old Risler*) (1874)、英訳名 *Sidonie* (Boston: Estes and Lauriat, 1877) に出てくる素敵なクレオールの唄のリフレインである。ハーンはこの記事の中でこのリフレインに特に魅了されてしまったと書いている (*Lafcadio Hearn: American Writings*, The Library of America, 2009, 705)。

このクレオール人に関するハーンの関心をさらに強く印象付ける記事がもう一つ書かれている。それは "The Creole Patois" (*Harper's Weekly*, January 10-17, 1885) で、まずニューオーリンズの下町の一角に肌の色がとりどりの人種が住んでいて、彼らはフランス語・英語の他にメキシコ訛りのスペイン語を話すが、それらの元は生まれついて聴かされた「母の言葉クレオール語」("the foster-mother tongue, the household words" (同書、745) であり、それでそこの住民が守っているのが生粋のクレオール語だと言う。

続いてハーンは、クレオール語の魅力はその混成の性質にあると言

い、丁度美しい八分の一混血娘（“a beautiful octoroon,” 同書、747）と同様だと、その魅力をクレオールの美女に例えて見せるのであるが、これが興味深い。つまり、クレオール語は「言語上の異種混交」（“linguistic miscegenation,” 同書、746）から生まれた子孫であり、「まさに交わり」（“the very intercrossing,” 同書、746）の力によって、「不思議なほどのしなやかな見目麗しさ」（“a strangely supple comeliness,” 同書、746）を持つに到っていると言うのであり、クレオールの女性の比類ない美しさもこの「血の交わり」にこそその要因があると言うのである。

“miscegenation”と言い “intercrossing”と言えば、まさにハーン自身の混血児としての存在そのものを示唆する言葉である。アメリカの土壌に咲き出た美しい人工のクレオールの混血娘たち（“Daughters of luxury, artificial human growths,” 同書、746）――奴隷制の廃止と共にこうした美しい、まるで温室で大切に育てられた花（“splendid plants reared within a conservatory,” 同書、746）――は姿を消してしまったと、ハーンは嘆いている。そして同様にクレオール語もやがて消滅する運命にあると予言するのである。だからクレオール語で書かれた物語や詩を今のうちに保存しておく必要があると言うのであり、その運動がまだ始まったばかりであると言う。

さて、この記事でも、上述した*Cincinnati Commercial*の記事同様に、ハーンは、未だ編集されていないクレオール文学には歌や、韻文の風刺や、ことわざ、妖精物語が沢山あり、それらがすべてフォークロアという項目のもとに入れられていると言い、その中の抒情詩の部分から自らの小説にリフレインを見事に借用したのが、アルフォンス・ドーデだと言うのである（同書、747）。

ここで筆者はセオドア・ワッツ＝ダントンの第二の長編小説『ヴェスプリー・タワーズ』に登場するクレオールの美女ジョセフィーヌ・サールウェルを思いださずにはいられない。主人公のイギリス女性の相棒としてアメリカからやって来たジョセフィーヌは、愛する男レッドウッドを、親友となったヴァイオレットに託して、自らは身を引いてどこかに立ち去っている。丁度もう一つの名作『エイルウィン』（*Aylwyn*, 1898）において、主人公の男性ヘンリー・エイルウィン――彼自身も祖母のジプシーの血を引いて

いる――を愛しながら、エイルウィンが愛しているウィニー（Winnie）という少女の命を救って、自らは彼の前から立ち去っていく、ジプシー女性シンフィー（Sinifi）を思わせ、読者の涙を誘う。このジョセフィーヌがヴァイオレットとの対話において、話題にするのが四分の一黒人の血が混じっているフランスの小説家アレクサンドル・デュマである。前項で記したことだが、ジョセフィーヌは、デュマがアメリカの地に足を踏み入れなかったのは、イギリスと違って、アメリカ人が混血にはとても敏感で、内心それに対する反発が強いからだと言う。でも彼女自身がクレオールの血を引いているので、白人のアメリカ人よりも、人種のことをあまり意識しないイギリス人の方が好きだと言うのである。

このようにして、クレオールの血を引くジョセフィーヌを小説に登場させたワッツ＝ダントンと、片や自らの小説にクレオールの唄のリフレインを幾度となく借用しているドーデ及びそれに関心を抱くハーンとは、小説家・詩人としての資質の上で、お互いに共鳴し合う部分があったことが分かるのである。

（5）シチリア人とコルシカ人の血を巡って

（4）との関連で、ハーンとセオドアとの接点で、ハーンの“New Orleans, December 21”（既出*Lafcadio Hearn: American Writings*所収）とセオドアの小説『ヴェスプリー・タワーズ』で言及されるアレクサンドル・デュマの『モンテ・クリスト伯』の中に興味深い一節がある。

ハーンは、上記のエッセイの中で、ニューオーリンズの港にやって来た地中海出身の船乗りに流れる「混血」（“the mingled blood”/ “this strange blending of Nations,” 690）とそれが生み出す「奇妙な結果」（“strange results,” 690）について、よい血が交われば交わるほどそれはより一層奇妙な結果を産むというのである。その例としてハーンは、シチリア人を挙げている。「シチリアの晩鐘」（the “Sicilian Vespers”）という大虐殺を起こしたシチリアの人の子孫も、ここ、ニューオーリンズの町には居る。彼らにはローマ人、カルタゴ人、ムーア人そしてノルマン人の混じり合った血が流れている。地中海という地理的トポスがこの血の混淆を生み出した訳で、それが本能的に残虐な血の継承者を産んだというのである。それでシ

チリア人は特殊な環境に置かれると（そのような環境が、ここ、ニューオーリンズの街中にはある、例えば袋小路のような遮断された場所）、彼らは法の支配をものともせずに、彼らにとって唯一の法則である「血の復讐」（“*vendetta*,” 691）の本能に従って、敵を殺戮する。彼らは毒蛇のような執念深さで復讐の機会を狙い目的を遂げると言う。殺戮されたものは、死の間際にも家族の者や、親友以外には殺戮者の名を言わないし、殺戮を目撃しているシチリア人の仲間でさえ、如何に尋ねられても殺人者の名を明かさないという掟に従っている。そして今度は殺された者の兄弟乃至は親友が殺人者に復讐し、いずれかの側の家族乃至は友人がすべて消えてなくなるまでは、復讐が止むことなく続くとハーンは書いている。

このようなシチリア人の執念深い殺戮の繰り返しが、いろんな民族の血の混じりあいから生じる「奇妙な結果」だとハーンが言うのを聴くと、筆者はなぜハーンがそれほどまでに血の混じりを強調しているのかについて、考えさせられる。それは彼自身の体の中に多くの民族の血の混淆があるからだという事実に逢着する。彼の父はアングロ・アイリッシュで、母はギリシャのキシラ島の出身であり、ハーンの伝記作者ティンカーの言うように、ハーン自身「異種族混交」（“miscegenation,” 28）の存在であったことの意味を改めて考えさせられる。ハーンの中に自分が「異種族混交」の血の継承者であるという意識があったがゆえに、アメリカでは、一時ではあれ、自分を暖かく受け入れてくれる黒人の血を引く癒しの女アルシーア・ファウリとの結婚を、当時のオハイオ州の白人と黒人の結婚禁止という法律に逆らってまで、密かに式を挙げたのである。ハーンの場合、シチリア人の「血の復讐」と言った最悪の遺伝の継承者ではなく、「異種族混交」の結果として、彼には北と南の対照的な特性が混じり合って、豊かな想像力や幻想性が生まれたと思われるし、また彼がこうした様々な血の継承者としての自分の存在の特性を意識するところから、自分という存在は過去の祖先の存在と記憶の集積体、総合体にほかならず、自分の「良心」はすべて祖先の感情の支配するところに従って動かされているとまで、断言するのである（平川祐弘編『小泉八雲　神々の国の首都』、講談社学術文庫所収「家庭の祭屋」参照）。彼の主張する「美は記憶である」（平川祐弘編『小泉八雲　怪談・奇談』、講談社学術文庫所収、「美は記憶なり」「美の悲哀」

参照）とか「輪廻転生」という仏教的死生観の元を質せば、彼の中を流れる「異種族混交」の祖先の血ということへの意識が強く働いているのではないかと思われるのである。

ハーンのシチリア人の血への共感によく似たものとして、筆者が思い出すのが、アレクサンドル・デュマの小説『モンテ・クリスト伯』に登場するモンテ・クリスト伯爵の家令ベルツッチオ（Bertuccio）の存在である。ベルツッチオはフランス帝政下のナポレオン一世の軍隊で活躍していた兄が王政復興になって殺戮されたのを悲しみ、ニームの検事になっていたヴィルフォール（Monsieur de Villefort）に殺人犯を捜索して欲しいと頼み込むが、ヴィルフォールはこれを鼻であしらい相手にしない。それに腹を立てたベルツッチオは兄の復讐のために、この検事ヴィルフォールに対し「仇討ち」を誓い、彼を死に致させるまで付け狙うのであるが、そのような気質は彼がコルシカ人だからと、自ら彼の今や庇護者であり、自身が復讐の化身であるモンテ・クリスト伯に告白する場面がある（『モンテ・クリスト伯』44章「復讐」）。

デュマの言うベルツッチオはコルシカ人（フランス人）であって、ハーンの言うシチリア人（イタリア人）ではない。だがハーンとデュマが言及しているシチリア人とコルシカ人は同じ地中海人で、いわば隣同士であり、二つのテクストからして、この二人は気質の上で極めて類似していることが分かる。ハーンはアメリカ滞在時代の記事ではデュマへの言及はないが、当時アメリカでも人気を博していたデュマの名作『モンテ・クリスト伯』は、フランス文学通のハーンであるから、読んでいたであろうと思われる。セオドアが『ヴェスプリー・タワーズ』で、マルティニク島のジョセフィーヌと同名の登場人物に言及し、また地中海のコルシカ島出身のベルツッチオの登場する『モンテ・クリスト伯』を特に話題に取り上げたことと、ハーンがしているマルティニク島のジョセフィーヌの石像への言及とニューオーリンズの住民になっているシチリア人への言及を考え合わせる時、二人の作家の間に不思議な接点を、筆者は感じないではいられないのである。

（6）“violet”という形容辞を巡って

ハーンは、“Chita: A Memory of Last Island; Part III. The Shadow of the

Tide”（既出 *Lafcadio Hearn: American Writings* 所収）においても、メキシコ湾の Feliu の島の夜の色を「紫」（“the vast sweetness of that violet night,” 140）と言い、“Two Years in the French West Indies: A Midsummer Trip to the Tropics”（同書所収）の中のマルティニク島に関する描写の中もで、ここでは夜は落ちてくるのではなくて、ちょうど蒸発のように地面から上がって行き、月の出と共に空は「紫色」（“violet,” 206）に輝くと言う。この熱帯の月には不思議な魔力があって、森の生き物が活動する、つまり鳴くのは暗くなってからであり、月の力を恐れているフシがあると言う。ここで注意しておきたい点が二つある。一つは月の出と共に空が「紫色」になるという点と、二つ目は熱帯の月の魔力である。前者は次に論じるジョセフィーヌのことと関係があり、後者はシャーロット・ブロンテの名作『ジェーン・エア』と深く関係があるからだ。まず第二の点について先に述べる。熱帯の月の魔力（“a weird magnetism”/ “a singular effect on the nerves,” 206）と言えば、思い出すのは『ジェーン・エア』に登場する月が主人公ジェーンの行動に及ぼす力であり、その計り知れない影響力については、拙著『「岬」の比較文学』（英宝社、2006）の『ジェーン・エア』論で詳細に論じた通りである。月とジェーンは一体となって行動する、月が天頂に昇れば昇るほどジェーンの持つ力量が発揮されるというもので、特に屋根裏部屋に幽閉されている狂女マーサの秘密がジェーンに暴露されるのは天頂に昇った月の煌々と射す只中であり、そのマーサの出身地こそは、マルティニク島ではないが、同じ西インド諸島ジャマイカであることとも関係があるだろう。

では、第一の着眼点である夜の天空の「紫色」をめぐる筆者の考えを述べる。ハーンはサン・ピエールの港から蒸気船で一時間半かけてマルティニク島の首都フォール・ド・フランス（Ford-de-France）に到着する。ここは地震により壊滅して、かつての壮麗さは見る影もなくなったが、サヴィーヌの公園は見る価値がある、そこにはナポレオン・ボナパルトの妃ジョセフィーヌ（Josephine）の大理石像があるからだと言う。職人の手に成る大理石像は鑿の跡さえ残るものだが、その甘美なクレオールの顔にこそ、西インド女性の魅力のすべてが生きている —— “when you look straight up into the sweet creole face, you can believe she lives: all the wonderful West

Indian charm of the woman is there.”（208）――とハーンはその像を絶賛する。（Cf. レヴィ＝ストロース（Claude Lévi-Strauss）が名作『悲しき南回帰線』（*Tristes Tropiques*, 1955）のはじめの方（第一部第3章）で、第一次大戦時フランスからの過酷な長旅の後「アンティル列島」のマルティニク島にやっと辿り着く場面があるが、彼によれば、広場には「ジョセフィーヌ・タシェール・ド・ラ・パジュリ、後のボーアルネ夫人（Alexandre Beauharnais子爵と結婚、夫の死後社交界の花形となり、ナポレオンと再婚した）の緑青のふいた銅像が置き忘れられたように建っていた」（室淳介訳『悲しき南回帰線』上、講談社学術文庫、37）。ハーンの見た像は大理石像であった。）

さらに筆者が注目するのは、石像のジョセフィーヌが、その石像を取り囲む七本の棕櫚に取り囲まれて、夏の海の「紫」に広がる空の彼方へと、碧色の光の輝きの中を、振り返って自分の誕生の地、美しくて眠くなるようなトロワ・アイレッツを眺めやっているその眼差しである。その顔はつねに同じ半ば夢見るようで、半ば悲しげな微笑が、得も言えず哀れを誘うとハーンは言うのである。

筆者は前述の節で、夜の空の「紫色」に注目したいと言ったが、ここでも夏の海の上の空は、碧い昼の光の中でも、「紫色」である――“Over violet space of summer sea, through the vast splendor of azure light, she is looking back to the place of her birth, back to beautiful drowsy Trois-Islets,—and always with the same dreaming, half-plaintive smile,—unutterably touching.”（208）――筆者がこの描写を読んで想像を、否、空想をたくましくするのは、既に取り上げているセオドア・ワッツ＝ダントンの遺作小説『ヴェスプリー・タワーズ』に出てくるクレオール人のジョセフィーヌとは、このマルティニク島をめぐるハーンの描写と深く関係しているかもしれないということである。

月の出の空を “violet” と形容し、夏の海の広がる空間を “violet” と繰り返すハーンのこの形容辞（その他にも、「フランス領西インド諸島の2年」（“Two Years in the French West Indies”）では、この「紫」の空の色が頻繁に繰り返されている）は、生まれ故郷のマルティニク島の女主人公ジョセフィーヌと深く関わっているような気がする。『ヴェスプリー・タワーズ』の女主人公のヴァイオレットが、ロンドンでの4年間の極貧の生活の末、

ウォリックシャーの田舎の館に戻った時、彼女の帰館を待っていたのが、クレオール人の女性ジョセフィーヌであったからだ。二人の出逢いは、偶然の一致とは言い難いような気がするのである。セオドアはこの「フランス西インド諸島の2年」というハーンの旅日記の一節を読んで、ヴァイオレットとジョセフィーヌを結び付けたのではないだろうか。そして『ヴェスプリー・タワーズ』のジョセフィーヌが、自らも愛するマーティン・レッドウッドを親友となったヴァイオレットに委ねて、行方も告げず立ち去っていくその先は、ひょっとするとここマルティニク島ではなかったのであろうかという思いを振り払うことができないのである。この覚書をお読みの諸氏には、ぜひ拙訳『ヴェスプリー・タワーズ』とハーンの旅日記「フランス西インド諸島の2年」を併せて読んでいただきたい。

こういうことが、仮令空想の内であろうと、生じるのであるから、文学の研究、否、読書は辞められないのである。

――近畿大学名誉教授